突如、私達の前に出現した、逆十字の形をした黒い結晶体。大柄な成人男性でも、逆さにすれば余裕で磔に出来るサイズのそれは、異様な存在感をもって屹立している。まるで墓標のようだが、不思議と不吉な印象はない。むしろそれは、教会のシンボルである十字架と同様に、見る者に神秘性や神々しさを感じさせる。

「あれは……」

屹立する逆十字の交差部分。そこに見知った存在を認め、私は思わず独りごちた。赤い紐を介して、ネックレスのようにぶら下がったそれは、私のパートナーであるＭＢデバイス〈カグツチ〉――その待機モードだ。

やみひめさんは〈カグツチ〉を使い、〈機獣少女〉となった状態でクラウさんに刺された。それから不可思議な現象が起こり、眼前の黒い結晶体が現れた。そこに待機状態の〈カグツチ〉がかかっているという事は、やはりあの結晶体はやみひめさんなのか……？

ショートしそうになる思考を落ち着かせ、現状で採るべき行動を決める。まずは〈カグツチ〉の回収だ。身を護る手段がなければ、この場に留まる事も、離脱する事も出来ない。

私は全力で駆け出す。結晶体を間に挟み、クラウさんはその向こう側にいる。あの爆発的な加速力をもってすれば、ないも同然の距離だが、彼女は結晶体を警戒している。ならば、今の私の脚力でも〈カグツチ〉に辿り着けるかもしれない。考えていても仕方がない。やるしかないのだから。それなら、クラウさんが警戒している今が好機のはずだ。

だが――

「――ツバキ！？」

後方から私の名前を呼ぶ橘さんの声が聞こえた。悲鳴にも似た口調なのは、私の身を案じてくれているからだろう。クラウさんの姿が消えたのだ。

私は構わず〈カグツチ〉に手を伸ばす。今の私は無力な小学生に過ぎない。下手に身構えたり、迎撃しようとしたところで、クラウさんに対して何の意味もない。ならば形振り構わず、一瞬でも早く〈カグツチ〉を手中に収めるしかない。それが出来なければ死ぬだけだ。

もう〈カグツチ〉は目と鼻の先だ。ほんの数センチで指先が触れる距離。

だが、間に合わない。結晶体ごと私を両断しようというかのように、クラウさんが視界に現れた。頭上に掲げた、爪のような四本の刃を備えた手甲を、私に振り降ろす。きっと次の瞬間には、私は殺された事にすら気付かず、その生涯を終えるだろう。首を斬り飛ばされ、身体は何が起こったのか把握すら出来ず、無様にくずおれる。胴体から切り離された私の生首を抱いて、橘さんは涙を流してくれるだろうか。この星に私を知る人間は、もう彼しかいない。迷惑な話だが、せめて、ほんの少しでも悲しんでくれれば……。

そんな風に諦めきった思考をしていた私に、しかし、その結末は訪れなかった。

「――――ッ!?」

クラウさんが無表情をわずかに驚愕の色に染め、息を呑んだ。私めがけて振り降ろした手甲が、空中で停止していたのだ。まるで見えない手に受け止められているかのように。クラウさんの手甲が停止する一瞬、何か壁のようなものが見えた気がした。恐らく、不可視の障壁のような何かが展開されている。

呆然とその様子を眺めていた私は、はっと我に返ると、結晶体の交差部分にかけられた〈カグツチ〉を掴んだ。

「――〈拘束〉ッ!」

間髪入れずに、MBジャケットを展開するための起動言語を叫ぶ。自分の中身が書き換わっていくような不思議な、しかし不快ではない感覚。すでに何度となく経験しているものだ。自分自身と同様に、身に纏った衣類も再構築され、〈機獣少女〉のための戦装束に変化する。やみひめさんと色違いの、和服とミニスカートを組み合わせたような赤いMBジャケット。右手に握られた〈カグツチ〉も、待機状態の黒い勾玉から、デバイス状態であるメカニカルなデザインの薙刀へと変化している。

それを認めると、クラウさんは大きく跳躍して私から距離をとった。未知の相手に対して、即座に仕掛けるのは早計だと判断したのだろう。この注意深さはクラウさんの生来のものか、それとも彼女に憑依している〈カタストロ〉によるものなのかは判らないが。

「……〈カグツチ〉」

『――――』

もしかしたらと思い、右手に握った〈カグツチ〉に声をかけるが、応答はない。MBデバイスとしての機能は働いているが、意識は戻っていないという事か。

だが、気落ちしてもいられない。MBジャケットも、武器としての〈カグツチ〉にも問題はないが、それらを維持するための機力を生成する私自身のMBコアは、やはり活性化していない。環境の変化による一時的な機能不全かもしれないと期待したが、地球の大気組成との相性が原因だとすれば、改善しようがない。クラウさんを相手に、残りの気力でどこまで戦えるか――

「え……?」

橘さんを連れて、この場を離脱する事もやむなしかと思考を巡らせ始めていると、私は自分の異変に気付いた。MBコアは活性化していないのに、機力は欠乏していない。むしろ、充実している。だが、それは私の機力ではない。この感覚は……。

「――ツバキ」

私は背後から投げかけられた声に振り返る。気配は察していたので驚かない。
「橘（たちばな）さん」
橘アサト。
この星で、やみひめさんの次に知り合った人物だ。高校三年生のまだ少年だが、小学五年生の私から見れば、充分に大人に見える。黒い髪は男性としては長めで、よくよく見れば整った顔つきをしているのだが、年齢に不相応な気怠（けだる）い雰囲気がすべてを台無しにしてしまっている。実際、やる気もなければ覇気もない。出会ってまだ数日だが、ダメ人間だという事は判った。
それでも、本質的には悪い人間ではない。
むしろ、私にとっては好ましい類（たぐい）の人種に入る。
私のような人間の気持ちを理解してくれる。私のような人間に親切にしてくれる。
それは、この星で頼れる相手が限られている私にとって、救いだった。
私は自分で思っているより、存外、ちょろい性格なのかもしれない。
こんな風に思っているなど、本人には口が裂けても言えないが。
「なあ、どうなってるんだ。これは、やみ子なのか……？」
橘さんは私の横に並び、逆十字の黒い結晶（クリスタル）体に視線を移す。恐慌状態からは立ち直ったらしく、今は冷静に見える。それでも、やみひめさんの身を案じているためか、どこか落ち着きがない。
「これは推測ですが、やみひめさんはこの結晶（クリスタル）体の中だと思います」
「この中……？」
私の言葉を聞き、橘さんは目を凝（こ）らして結晶（クリスタル）体の中身を見ようとするが、それは叶わない。半透明のようだが、それは外郭（がいかく）のみで、中身はクロムメッキのような黒い光沢を放っている。
「どういう理屈なのかは判りませんが、私の中に、私のものではない力が流れ込んでいるんです。これは恐らく、やみひめさんのものです」
『機力（きりょく）』と言っても混乱させるだろうから、私は『力』という表現を使った。そして、私が先ほどその力に感じたのは、やみひめさんの機力に似ているという事だ。
「そして、その力はこの結晶（クリスタル）体から来ているようなんです」
理屈は判らない。それでも、事実は事実として受け入れるしかない。やみひめさんの機力が、この結晶（クリスタル）体から私に流れ込んでいる――それはつまり、彼女は中で生きているという事ではないか？
「……そうか」

状況は予断を許さない。それでも、やみひめさんが生きている可能性が生まれた事に、橘さんは希望を見出したようだ。

本当にこの人は、やみひめさんを大切に想っているのだろう。

「橘さん、貴方はこの場を動かないでください。この結晶体の傍にいれば安全なはずです」

先ほど、私をクラウさんの攻撃から護ってくれた障壁。それ自体を目視は出来ていなくても、それが私を護ってくれた瞬間は、橘さんも見ていたはずだ。

「ツバキも戦うんだな……」

私のMBジャケット姿を見て、ただの無力な少女でない事は察してくれたのだろう。橘さんは引き止めるような事は言わなかった。

「やみひめさんが戻ってくるのか。戻ってくるとして、それが何時になるのか。戻ってきても、すぐに戦えるのか。何も判りません。なら、私がクラウさんを止めなくては」

私は橘さんに背を向け、クラウさんがいる方向に視線を向ける。結晶体の力と、私の戦力を警戒しているのか、かなり距離をとって静観している。私が仕掛けてくるのを待っているのだ。慎重なのか、それとも臆病なのか。どちらにしても、やる事は変わらない。

ふと、背後から視線を感じた。当然、橘さんのものだし、私は彼の目の前にいるのだから、視線を受けるのも当然だ。だが、その視線――いや、気配というべきだろう。それが変化したのを感じたのだ。

この感覚は――『戸惑い』だ。

私に何か言うべきか迷っている？

そう思い至り、私の中でちょっとした悪戯心が芽生えた。

「――私には何も言ってくれないんですか？」

橘さんに背を向けたまま、私は思いついたように言った。すると背後から、彼の狼狽える気配が伝わってくる。

「やみひめさんには『がんばれ』と言っていたのに、私には言ってくれないんですね？」

私は身体ごと振り返り、少しだけ意地の悪い笑みを浮かべる。もちろん、背後への警戒は怠らない。

「えっと……すまん。ツバキには俺の言葉なんて、必要ないんじゃないかと思って、な」

そう言って、橘さんは気まずそうな顔をした。正直な人だ。私を過大評価しているし、自分を過小評価しているのだろう。自分の言葉に、何の価値もないと思っている。

「そんな事はありません。私だって、誰かに応援してほしい時もあります」

「そうか」

私の言葉に納得したのか、橘さんはそっと右手を上げ、私の頭に掌を載せた。そし

て、優しく数回撫(な)でると――

「――がんばれ」

そう言った。やみひめさんの時と同じように、ほんの少しだけ優しい笑みを浮かべて。

とくん、と私の胸が高鳴った。

ＭＢコアは活性化していないのに、胸の奥で、別の何かが湧き上がってくる感覚を覚えた。きっと、やみひめさんもこんな気持ちだったに違いない。

やみひめさんを、少しだけずるいと思った。

同時に、やみひめさんに対して罪悪感も覚えた。

私がやっているのは、そういう感情を抱いて当然の行為だろうから。

橘(たちばな)さんの顔を見ていられなくなって、私は再び彼に背を向けた。

「ツバキ……？」

私の態度を不審に思ったのか、橘さんが私の名前を呼んだ。今の私は、それすら背徳的な行為に思えて、返事が出来ない。

「いいですか。絶対にこの場を動かないでくださいね。橘さんに何かあったら、私がやみひめさんに合わせる顔がありませんから……！」

なんとか、強引にそれだけを告げて、私はクラウさんに向かって足を踏み出した。これ以上は、平静を保てる自信がなかった。

こんな経験は初めてだ。

これではまるで――

サイドストーリー #08

『想いを胸に』

陽が落ち、月明りと街灯の光が照らす夜の駐車場に、聞く者の神経を逆立てるような異音が響く。

クラウさんが両手に装備した、爪を思わせる四本の刃を備えた手甲。それが右、左と、交互に規則正しく振り下ろされ、そのリズムに慣れたであろうタイミングを見計らっての、遠心力を上乗せした強力な後ろ回し蹴り。その怒濤の連撃を、私は薙刀のデバイス・モードに姿を変えた〈カグツチ〉で捌いてく。

一撃一撃が速く――そして重い。まともに受けていては、私の体力も〈カグツチ〉の機体ももたないだろう。私はクラウさんの攻撃を流し、時にカウンターを放つが、彼女は即座に後方に跳んで離脱してしまう。その繰り返しだ。

私が以前の状態であれば、すでに機力が尽きていただろう。だが、今はやみひめさんの機力を借り受ける事で、ＭＢコアが万全の状態と変わらない力が出せている。

契約を交わした〈機獣少女〉とＭＢデバイスの間には『経路』が形成される。それを通じて念話を行ったり、契約者の生体情報を確認する事も出来る。恐らくだが、〈カグツチ〉を迂回して、私とやみひめさんの経路が繋がり、彼女の機力が流れ込んでいるのだと思う。仮初とはいえ、ＭＢデバイスが二重契約を行った例はないため、そんな話は聞いた事がないが。

「――ふッ！」

「！？」

正確にこちらの首を刈りに来る後ろ回し蹴りを身を沈めてかわし、私は薙刀の穂先をクラウさんの正中線を分断するように下からすくい上げる。彼女は一瞬、驚いたようなリアクションを見せたが、すぐさま、背に装備した『機械の羽根』を稼働させ、離脱してしまう。

昨夜のものより、サイズは大きく、デザインは複雑化しており、素人目に見ても高性能で高出力なスラスター・システムであると判る。放射状に左右に展開された八枚の刃のような羽根。その間には四基の巨大な噴射口が配置されている。恐らく、四基の噴射口で加速し、八枚の羽根は姿勢制御のためのバランサーなのだろう。工業製品の進化はサイズの小型化・機構の簡略化がセオリーだが、その逆を行く事で性能を強化する――いわゆる恐竜的進化。それは人間ではない〈カタストロ〉だからこその発想なのかもしれない。

なんにせよ、非常に厄介だ。

進化した『機械の羽根』を展開し、クラウさんが斬り込んでくる。昨夜の戦闘で知られているからだろう。本来は隠し武器であるはずのレーザー・ブレードを惜しげもなく生成した。私の〈カグツチ〉に対し、手甲の爪では有効範囲の面で不利と判断したのだろう。

これで彼女の有効範囲（リーチ）は二倍になった――が、それでも薙刀の方がまだ長い。レーザー・ブレードの軌道を先読みし、迎え撃つ。

――ガキィィィンッ！

硬質な物体同士が高速で衝突した、嫌な金属音が響く。私はレーザー・ブレードではなく、その発生器である手甲部分を、大上段から降り降ろした〈カグツチ〉で叩き落としたのだ。結果、手甲から生成されているレーザーの刃がアスファルトの地面を突き刺し、クラウさんの動きが封じられる。私はその機に乗じてクラウさんに接近するが、彼女は手甲を手放す事で、呆気（あっけ）なく拘束から逃れてしまった。

「――オンリコン・ス・トラクチ」

私から距離をとったクラウさんが呟くと、彼女の右手には手放したはずの手甲が握られていた。私の足下には、すでにレーザー・ブレードは消えているが、先ほど叩き落とした手甲が転がっている。つまり、あれは自分の手元に呼び戻した訳ではなく、新たに生み出した事になる。昨夜の戦闘でも目撃したが、不可解な現象だ。少なくとも、ゼヘナにはあんな技術は存在しない。

そういえば、人格が変わったやみひめさんも、同様の現象を見せていた。長剣の姿の〈カグツチ〉をいくつも複製し、それを飛び道具のように扱っていたが、それと同種の技術、もしくは能力なのだろうか。

どちらにせよ、これでは決着がつかない。

今の私は十全に戦える。これなら、クラウさんを止める事も可能だろう。だが、それは彼女を〈カタストロ〉ごと殲滅（せんめつ）する事を意味する。そんな事はしたくない。少なくとも、やみひめさんはそんな事のために、私に機力（きりょく）を貸してくれている訳ではないと思う。やみひめさんが戻ってきた時、彼女を悲しませる事はしたくない。

だが、クラウさんは強い。全力で戦わないと、現状維持が続き、やがては限界が訪れる。それは私かクラウさんの体力かもしれないし、長引けばこの国の治安機構――たしか警察以上の武力を持った自衛隊という組織があったはず――が介入してくる可能性もある。事が大きくなってしまえば、被害が増えるだけでなく、やみひめさんもクラウさんも、橘さんだって、これまで通りの生活は出来なくなるだろう。

「……」

まだ深い時間ではないとはいえ、病院の傍（そば）という事もあり、本来は閑静な場所のはずだ。警報が出されているとはいえ、これだけの戦闘を行っているにも関わらず、野次馬や警官

の一人も現れない事に、今更ながら疑問を覚えた。爆発などには至っていないが、すでに駐車場にあった数台の車は廃車同然の状態になっている。先ほどのアスファルトのように、あちこち地面は抉(えぐ)れてしまっているし、街灯も一本だけではあるが切断されてしまっている。

もしかしたら警報レベルが高く、周囲一帯が完全に封鎖され、すでに治安部隊が出動準備に入っているのかもしれない。今は言わば、嵐の前の静けさ……。

だとすれば、一刻も早く事態を収拾させる必要がある。可及的速やかにクラウさんを無力化し、黒い結晶体(クリスタル)を此処(ここ)から移動させる。そのためには――

「〈ブラスター・システム〉――起動」

『――〈ブラスター・システム〉の起動要請を確認』

私の言葉に〈カグツチ〉の機械音声(マシン・ヴォイス)が答える。声は紛れもなく〈カグツチ〉のものだが、これはあらかじめ登録されたガイド音声だ。そもそも、MBデバイスに人格など存在しない。〈カグツチ〉がまるで人間のようなコミュニケーションを行っているのは、彼女が特殊な機獣のコアだからに過ぎない。ガイド音声の機能を拡張・改変し、自分の意思を人間の言葉に変換、更に発声するためのシステムとして再構築したのだ。初めて〈カグツチ〉に呼びかけられた時には驚いたし、誰かの悪戯(いたずら)かと疑った。メンテナンスを担当しているムラサメ社のメカニックは、専門家であるが故に、私以上に驚いていたが。

『起動コードの入力を求めます。〈汝(なんじ)、人なりや?〉』

私の知る〈カグツチ〉の声で、しかし私の聞きたい〈カグツチ〉のものではないガイド音声は、淡々と決められた文句を告げてくる。

今になって気付く。私がどれだけ〈カグツチ〉の存在に支えられていたのかを。無駄口を叩く事も多かったが、今にして思えば、私を気遣ってくれていたのだと判る。

「〈カグツチ〉……」

『起動コードの入力を求めます。〈汝、人なりや?〉』

同じ内容を繰り返すガイド音声。それが当たり前なのに、今の私は、それをひどく悲しく感じてしまう。

『起動コードの入力を求めます。〈汝、人なりや?〉』

「――〈否(いな)、我は機獣少女。悪鬼羅刹(らせつ)の類(たぐい)なり〉」

だが、いつまでも感傷に浸っている訳にはいかない。私は求めに応じて、起動コードを音声入力する。

『起動コードを承認。〈ブラスター・システム〉起動。ご武運を』

感情のこもらないガイド音声であっても、〈カグツチ〉の声には違いない。最後の言葉は、

ほんの少しだけ慰めになった気がする。

「――んっ」

即座に働いたシステムが、すでに〈機獣少女〉として書き換えられていた私という存在を、更に書き換えていく。具体的な言葉で説明出来る感覚ではない。自分は自分のまま、中身だけが別物になっていく――やはり上手く表現は出来そうにない。

そんな一瞬の感覚が終わると、私のＭＢジャケットが変化し、ＭＢデバイスである〈カグツチ〉の形状も変わっていた。ミニスカートだったアンダーが、踝まである袴に変わり、薙刀だった〈カグツチ〉も、弓のような形状に変わっている。

恐らく今の私の姿を、事情を知らない者が見たら、弓道着のようだと言うだろう。赤い袴から、巫女服を連想する者もいるかもしれない。

ブラスター・フォーム。

それが〈ブラスター・システム〉を起動させた、今の私の状態である。

ＭＢジャケットには、不可視の防護膜によって装着者を護る機能があるため、デザイン自体にはあまり意味がない。だが、このブラスター・フォームのＭＢジャケットには特殊な素材が使われており、装甲としてだけでなく、様々な機能が追加されている。この形状変化は試作品であるが故の機能で、まだ実用化はされていない。

「やりますよ、〈カグツチ〉」

ブラスター・フォームへと変化したＭＢジャケットに異常がない事を確認し、私は〈カグツチ〉に声をかけた。当然、返事はない。けど、それでもいい。そんな事は百も承知でやった事だ。

「――ふッ！」

短く息を吐き、私はこちらを静観していたクラウさんに踏み込む。私の変化には気付いていただろう。それでも、外見だけでなく、能力まで変化していれば驚いて当然だ。並の動体視力であれば、私がクラウさんの背後に突然現れたように見えたはずだ。そのくらい、今の私の動きは速かった。クラウさんが咄嗟に私の攻撃を回避出来たのは、恐らく本能的なものだろう。仮に背後からの攻撃に反応出来ても、身体が追いつけるはずがない。

私は紙一重で前方に跳んだクラウさんを追撃する。無防備な背中に肉薄し、まず厄介な機動力を封じるべく、展開している羽根を狙った。

しかし、クラウさんは急旋回すると、私の振り降ろした〈カグツチ〉の一撃を、左手の手甲で受け止めた。その際、翻ったスカートから一瞬見えた大腿部。そこに装備されていたのはスラスターの噴射口。おかしいとは思っていた。背中の『機械の羽根』で加速力は説明出来ても、方向転換までは不可能だからだ。だが、大腿部のスラスターがあれば、

逆噴射させる事で、今のような急旋回も可能になる。

私は力任せに〈カグツチ〉を押し込む。その膂力に片手では抗えず、クラウさんは右の手甲も添えるが、それでもじりじりと押されていく。

「――はぁッ！」

「――――ッ!?」

裂帛の気合と共に、私は〈カグツチ〉を一気に振り抜く。クラウさんの手甲の爪がすべて砕け、彼女の姿勢が崩れる。それでも手甲からレーザー・ブレードを生成し、クラウさんは応戦する。私はそれを〈カグツチ〉で受け止め――

「――ブレイク」

そう唱えると、私の身体を保護していた不可視の防護膜が、外に向かって弾けた。

不可視の防護膜――それはすなわち、高密度の機力で編まれた鎧である。それを任意の方向に向けて破裂させる事で、敵からの攻撃を相殺する、いわゆる反応装甲としての機能も持ち合わせている。今のはその応用で、言い方は悪いが、安全な自爆装置である。カウンターとしては非常に有効な機能だと言える。

意図的な機力の爆発による衝撃をもろに受け、クラウさんが後方に吹き飛んだ。

これが〈ブラスター・システム〉の威力だ。通常、人間の身体にはリミッターがかかっており、危機的状況に陥った際にそれが外れ、信じられない力を発揮する事がある。いわゆる火事場の馬鹿力と呼ばれるものだ。野生動物に比べ、生身では脆弱だと思われている人間でも、身体への負担を考慮しなければ、相当な力が出せる。

〈機獣少女システム〉とは、常に火事場の馬鹿力を使っても平気なように、身体を作り変えているに過ぎないのだ。

しかし、この〈ブラスター・システム〉は違う。あくまで超人レベルに留めていた使用者の能力を、機力が続く限り、大幅に強化する。それは人間の領域を逸脱し、〈カタストロ〉を殲滅するための存在になる事を意味する。

故に――悪鬼羅刹。

「――がぁぁぁぁぁッ！」

防護膜の爆発をもろに受け、尻もちをつく形で一度は地面に手を突いたが、クラウさんは獣のような叫びを上げて私を威嚇した。ハッタリ――そう感じたが、私は肌が粟立つような感覚に襲われ、咄嗟に右に跳んだ。結果的に、その判断は正しかった。どういう構造になっているのかは判らないが、クラウさんの黒いドレスの両肩が展開し、そこから短銃身のバルカン砲塔が顔を見せた。恐らく、牽制や近接防御用の装備だろう。威力は低くても、その連射性能は驚異的で、私の回避ルート上にあった看板は、蜂の巣を通り越して粉

微塵に粉砕されていた。

私は一度クラウさんから距離をとり、大きく弧を描くように彼女の背後に回り込み、再び『機械の羽根』を狙う。〈カグツチ〉を弓を放つように構え、狙いを定める。だが、弓に似た形をしているだけで、弦も張られていなければ、そこに番える矢もない。

当然だ。弓に似た形状をしているだけで、これは弓ではない。上下に伸びた部位は近接戦闘時には刀身となり、射撃時には姿勢安定用のスタビライザーとなる。そして、撃ち出すのは矢ではなく、使用者の機力なのだ。

私は右手で〈カグツチ〉を構え、左手は右腕の下に添える。弓を放つようにと表現したが、実際にはハンドガンを構える感覚に近いのかもしれない。弓は利き手で矢を後方に引くが、今の私は利き手を前に突き出しているのだから。

構え、照準を合わせ、引き金を引く。本来であれば一瞬で完了するような工程ではない。だが、今の私には可能だ。動体視力は超人すら凌駕し、肉体もそれに対応出来る。クラウさんの背後を取った瞬間にはもう、機力を集束させた弾丸を三発放っていた。

いわゆる三点バースト。弾を三連射する機能だと思われているが、実際には無駄弾の消費を防ぐため、三射で連射を止めるためのものである。

クラウさんに迫る三発の弾丸は、一発はかわされ、一発は爪の砕けた手甲で防がれ、しかし一発は『機械の羽根』を直撃した。正確には、二つの大型噴射口を備えたスラスターのうちの一基を破壊した。これで驚異的な加速力は封じたはずだ。手甲のように新しいものを生み出すかもしれないと思ったが、それは出来ないらしく、彼女は今度は正面から地面に突っ伏した。

いける。このままクラウさんを戦闘不能にし、拘束する。そう考え、〈カグツチ〉を射撃モードから近接モードに持ち替え、クラウさんに再接近を試みる。〈ブラスター・システム〉起動時の機力の消耗は、途轍もなく激しい。やみひめさんから流れ込んでいる機力量が多いから、なんとか維持していられるが、正常時の私のＭＢコアでは、三分ももたなかった。否が応にも、短期決戦に持ち込まねばならない。でなければ、機力が尽きて丸腰になってしまう。

今の私なら、クラウさんを殺さないように制圧する事も可能だ。相手を殺さないように戦おうと思えば、その数倍の戦力が必要になるというが、それが今はある。

――ごめんなさい。

私は内心で謝罪の言葉を告げ、クラウさんへの攻撃ポイントを絞る。効果的で、極力、痛みを与えない部位は――

「!?」

しかし、その算段がつく直前に異変は起きた。クラウさんがゆらりと立ち上がると、復元したであろう両手の手甲の爪を地面に突き刺した。次に両足を軽く広げ、踵から脹脛に沿って伸びていた細い板状のパーツが、踵を軸に、地面を噛むように下ろされた。その様は、まるで自分の身体をその場に固定しているようだった。

クラウさんの意図は判らない。だが、私に迷っている時間はない。何をするのか判らないなら、何かする前に制圧してしまえばいい。そう決め、私は攻撃態勢を続行した。

そこで私は信じられない光景を目の当たりにする。両足を軽く開き、前傾姿勢気味な体勢で、両手の手甲を地面に突き刺したクラウさんの口から――光線が吐き出された。

私は思考を巡らせ、最適な行動は何か考える。光線の正体は何だ？　光学兵器の類か？　だとすれば防ぐよりも避けるべきだ。後方には何がある？　避けた場合、それはどうなる？

「――くっ」

避けるべきだと判っている。それでも私は光線を受ける事を選んだ。私の後方には黒い結晶体、そして――橘さんがいる。あの結晶体なら橘さんを護ってくれるだろう。だが、私に機力を送っている以上、あの障壁を展開するだけのエネルギーの余裕がある保証はない。障壁を展開出来たとして、光線を防ぎきれる保証もない。その場合、結晶体の中であろうやみひめさん諸共、橘さんも助からない。ならば、私が防ぐしかない。発射を止めるのがもっとも確実な方法だが、それは間に合いそうにない。

再び展開した防護膜を解除し、攻撃のための機力もすべて、『盾』として正面に再構築する。これも機力の応用だ。

「ぐぅ……っ」

発射された光線――大出力のエネルギーの奔流に、機力で編まれた『盾』ごと押し込まれる。踏みしめた足がアスファルトを削り、じりじりと轍のような跡を刻んでいく。途轍もない衝撃と耳障りな警報に、私の体力と神経が擦り減らされていく。

視界が赤く染まっている。視力を保護するためのフィルター機能が働いたらしい。私の脳裏に鳴り響く危険を告げる警報と、網膜に投影されているメッセージも、ＭＢジャケットの機能である。〈機獣少女〉の状態は常にＭＢデバイスが観測しているため、本来は補助的な機能ではあるが、そのメッセージには、現在、ＭＢジャケットが自動で機能の一つを作動させたと表示されている。

〈Pair charged particles shield〉――その表示を見て、私は目を疑った。

対荷電粒子シールド……荷電粒子！？

過去の戦争――まだ機獣が兵器として使われていた時代において、最強クラスの威力を誇った兵器。空気中の静電気を取り込み、エネルギーに変換し、更に増幅したものを荷電

粒子と呼び、それを撃ち出すのが荷電粒子砲だと、物の本で読んだ事がある。現在では失われた技術が使われているため、ゼヘナには存在しないが、その理論自体は残されている。

何を考えてムラサメ社が、こんな機能を組み込んだのかは判らない。いくら試作品のMBジャケットとはいえ、明らかに無駄というか、使う機会などないはずなのに。とはいえ、その無駄な機能に助けられているのだから、文句を言うのは筋違いだが。

やがて荷電粒子砲の照射が終わった。恐らく十秒かそこらだったはずだが、私には途方もない時間に感じられた。MBジャケットの各所にある分割線が展開し、大量の排気熱が吐き出される。冷却機構が働いた結果だ。私も相当量の機力を今ので消費した。私に流れ込んでいるのはやみひめさんの機力だが、流れ込んだ時点でそれは私のものと同様なので、消費すれば私の疲労として蓄積される。

「……はあ……はあ……」

私は地面に片膝を突き、息を整えながら正面に視線を向けると、クラウさんも私と同様の状態だった。黒いドレスの各所が展開し、冷却作業を行っている。無表情は相変わらずだが、やや息切れし、疲労の色が垣間見える。

好機だ――が、私の消耗も激しい。正直、このまま突っ伏して眠ってしまいたいくらいの疲労感がある。

だが、それはクラウさんも同じはず。第二射を撃たれる前に、今のうちに――そう思い、自分を奮い立たせる。

立て。戦え。それが〈機獣少女〉だ。

〈カグツチ〉を杖のように地面に立て、私自身もそれを支えに身を起こす。機力の供給は続いている。〈ブラスター・システム〉で強化された身体はまだ動く。ここからは気力勝負だ。精神論は嫌いだが、そうも言っていられない。

しかし、やっとの思いで奮い立たせた戦意は萎え、心をへし折られるような光景を目の当たりにする。

クラウさんが再び荷電粒子砲の発射態勢に入っていた。

「そんな……早すぎる……」

力なく零してしまった言葉は、現実逃避のためだったのかもしれない。あれだけの威力を放ち、こんな短時間で第二射が撃てるはずがない。そんな期待を現実のものにするための。

だが、目の前の現実は変わらない。身体を固定し、前傾姿勢になったクラウさんの顔の正面に、ぼんやりとした『筒』のような輪郭が見えた。直径は約三十センチ、長さは一メートルほどだろうか。蜃気楼のように揺らめいて実体は把握しにくいが、あれは恐らく

『砲身』だ。クラウさん自身が空気中の静電気を取り込んでエネルギーに変換し、あの『砲身』が粒子加速器の役割も兼ねているのだろう。

それだけで荷電粒子砲として機能するのかは判らないが、私は専門家ではないし、クラウさんに憑依している〈カタストロ〉の事だって何も解明されていないのだ。今、ここで論じるべき事ではない。問題はこの状況にどう対応するかだ。

「……」

しかし、私の心はすでに折れかけていた。第二射を防ぐのは、恐らく不可能だ。発射自体を止める猶予もないだろう。ならば、自分だけでも離脱すべきではないか。背後の橘さんも、結晶体となったやみひめさんも、〈カタストロ〉に憑依されたクラウさんの事も投げ出して……。

私はふと振り返る。橘さんと目が合い、何か叫んでいるのが見えた。距離があるので声は聞こえないが、その表情と唇の動きで、何を言っているのかは判ってしまう。

『もういい！　逃げろ！』

私は振り返ってしまった事を後悔した。そんな事を言われてしまえば、もう逃げられない。逃げた後に残るのは後悔だけだ。自分を責め、悪夢で目を覚ます日々が続き、やがて自己嫌悪に押し潰される。

そんなのは――ご免だ。

私は〈カグツチ〉を両手で握り締め、正面に向けて構える。残った機力を総動員して、対荷電粒子シールドに回す。

私は馬鹿な事をしている。そんな事は百も承知だ。

だが、これしか思いつかない。

――『ツバキが死んだら悲しいよ。私は『がんばったね』なんて言わない。なんで死んじゃったのって、責めると思う。ツバキはそれでもいい？』

以前、やみひめさんが私に言った言葉を思い出す。きっと、やみひめさんは私を責めるだろう。だけど――

「……私、がんばりました。一生懸命やったつもりです」

だから――

「だから、ほんの少しくらいなら、褒めてくれますよね。『がんばったね』って、言ってくれますよね――」

この星に来てから、まだ数日しか経っていない。なのに、その間にあった出来事が、と

ても大きなものに感じられる。

色々な事があった。色々な事を教えてもらった。色々な事を考えた。

まだ、もっと多くの『色々』があるはずだ。あるはずなのに――

荷電粒子砲の第二射が発射される。

無情に。

無慈悲に。

私の存在を原子レベルにまで分解すべく。

「……くっ」

私は歯を食いしばり、来るであろう衝撃に備えた。

しかし――

「……？」

衝撃が来ない。目の前では荷電粒子の奔流が対荷電粒子シールドに阻まれ、まばゆい光が拡散しているという、状況を考えなければ幻想的な光景が広がっているのに……。

いや、違う。視界に赤いフィルターは下りていない。対荷電粒子シールドも展開されていない。では、荷電粒子を拡散させているのは何だ？

「――ツバキ」

ふと、私を呼ぶ声が聞こえた。聞き覚えのある、今一番、私を呼んでほしい声が。

私は無言で振り返る。敵が目の前にいて、危機的状態であるにも関わらず。私は、自分を護（まも）ってくれている力に安心しきって、戦士としてあるまじき行動を取った。けど、それも仕方がない。私はその力の主に、絶対的な信頼を寄せていたから。

「ただいま、ツバキ」

その人はそう言って、私のよく知る姿で、いつもの朗（ほが）らかな笑みを浮かべ、そして――

「――がんばったね」

私が今、一番言ってほしい言葉をくれた。

ポニーテールにした長い黒髪と、吊（つ）り目がちな橙（だいだい）色の瞳が特徴的な、私より一つだけ年上の少女。黒い和服を身に纏（まと）い、狼のような耳と尻尾が生えたその姿を、私が忘れる

はずがない。

「やみひめさん……うっ……ひっく……っ」

流遠(るとお)やみひめ。

私の代わりに〈機獣少女〉として戦ってくれた。

行き場のない私に、住む場所を与えてくれた。

私に優しくしてくれた。

私の――恩人。

「ごめんね、遅くなって」

やみひめさんはそう言って、感極まってしまい、嗚咽(おえつ)が止められなくなった私を、ぎゅっと抱きしめてくれた。

END

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『ゾイやみ』サイドストーリー＃08をお届け致します。

今回は『ゾイやみ』のもう一人の主人公・ツバキ視点のお話でした。何気に、劇中で変身するのも（変身後はありますが）、戦うのも、実質的には初となります。戦闘シーン自体も久々で、やはり小説で戦闘シーンを書くのは大変というか、シチュエーションが燃えないと楽しくありません。そういう意味では、今回のメインはアバンの甘酸っぱいシーンと、クライマックスの独り言のシーンなんですが……楽しくて仕方ありませんでした。手前味噌ですが、僕はこのシーンが書けて満足です。

余談ですが、劇中で『反応装甲（リアクティブ・アーマー）』の描写をやるかは悩みました。ロボットアニメだと『パトレイバー』くらいでしか使われてないので、今回のバトルで使おうと前々から温めていたのですが、先日放送された『鉄血のオルフェンズ』で使われていたので、「あ、この影響だと思われる……」とテレビの前で苦悩しました。結局、使いましたが。

ちなみに、今回の用法の元ネタは『リリカルなのは』のバリアバーストです。

では、よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』と、チェックをしてくださった紙白さんに感謝を。ありがとうございます。今回もクラウをひどい目に遭わせてしまい、申し訳ない気持ちでいっぱいです……。

もちろん、ちゃんと助けます。いつだって、どんな時だって！

２０１６／３／11　流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る